

# 九州ルーテル学院大学

## Teaching Portfolio

### 2020



所 属： 人文学科 こども専攻 保育コース

名 前： 水 町 愛

作成日：2020年10月14日

## 九州ルーテル学院大学 ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：水町 愛

所属：人文学部 人文学科 こども専攻

### 1. はじめに

このたび、ティーチング・ポートフォリオの作成を通し、自らの教育活動の方針や取り組み、またその成果を様々な根拠に基づいてまとめることとする。またこれを、自らの教育活動全般を見つめ直す良い機会とし、今後の改善にも役立てたい。

### 2. 教育の責任

本学における私の教育に関する責任は、主に人文学科こども専攻における専門教育科目の担当である。担当科目は主に音楽実技系の演習であり、受講生の多くが幼保系施設および小学校に勤めることを目指すことから、まずは指導実践に必要なとされる技能の習得を主に目指す。特に幼稚園教諭免許取得に必要な科目として本学独自に開講する教科においては、基礎技能を向上させるとともに、多くの角度から応用実践力を磨くことに力を入れており、そこに4年制大学の養成課程で学ぶ意義と価値を持たせたいと考えている。

音楽実技については、受講生の入学時点の経験値やスキルに大きなひらきがあるというのが実態である。特に初級レベルで学習をスタートする学生には、長期的かつ継続的な指導の必要性が求められる。同時に、技術的な鍛錬を積みながらも音楽に対する豊かな感性を磨くことや表現する喜びを味わうことは必要と考え、その意味で、受講生が意欲と関心を高め続けるための工夫にも努めている。

幼児期の子どもにとって、音楽との出会いは様々な面での成長をもたらす。その実現に直接かかわる人材の育成においては、スキルの習得に加えた感性教育にも力を注ぎたいと考えている。

#### 2.1. 授業科目の担当

2018年～2020年度の3年間は以下の表の科目を担当している。※2018年度は産育休

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
音楽	2019-2020 前期	35名程度	専門教育必修
器楽 I	2019-2020 前期	週4コマ総計90名程度	専門教育必修

器楽Ⅱ	2019－2020 後期	週4コマ総計90名程度	専門教育必修
器楽Ⅲ	2019－2020 通年	35名程度	専門教育必修
器楽Ⅳ	2019－2020 通年	35名程度	専門教育必修
器楽Ⅴ	2019－2020 通年	35名程度	専門教育必修
フレッシュマンゼミ	2020 年度前期	33名	共通教育必修
チャイルドケアゼミ	2020 年度後期	33名	専門教育選択
保育実践演習	2019 前期,2020 後期	35名程度	専門教育必修
特別研究	2018－2020 後期	平均5名	専門教育必修
卒業研究	2019－2020 後期	平均5名	専門教育必修

## ■ 主要担当科目

### 「音楽」

本科目は、読譜に必要な基礎的な音楽理論を理解するとともに、実技を伴うソルフェージュの課題を通してリズム感や音程感を身に付け、読譜力を向上させることをねらいとする。さらに、保育や教育の実践において音楽を応用する力をつけるための基礎的な技術を習得することも目指す。具体的には、応用力に必要な理論を整理するとともに、リトミック演習によるソルフェージュを通して音楽のしくみを身体で体得する方法を取り入れることにより「分かる」から「表現できる」へと繋げる工夫をしている。

### 「器楽Ⅰ」「器楽Ⅱ」

これらの科目は、幼稚園教諭免許および小楽興教諭免許の取得希望者を対象とし、それぞれの現場において不可欠であるピアノ（伴奏および弾き歌い）の基礎技能を習得することを目標に、複数の兼任講師と共に個別の実技指導を展開している。「器楽Ⅰ」ではピアノ演奏技術の基礎を学ぶとともに、練習方法と練習習慣を身につけ、読譜力を養いながら技術の向上を目指す。「器楽Ⅱ」では、さらに基礎技能を伸ばすことに加え、多くの弾き歌い課題に取り組み、実践力を向上させる。

### 「器楽Ⅲ」「器楽Ⅳ」「器楽Ⅴ」

これらの科目は幼稚園免許取得希望者を対象とし、すべて通年科目として開講している。保育士または幼稚園教諭を志す学生が、基礎技能から応用的な実践演習までを（入学から卒業まで）通して学び続ける体制を用意している。これらの科目では、主に音楽を用いた保育活動を実践することができるための力をつけることをねらいとしている。2年次にはコードの理論やコード伴奏法を習得することにより、伴奏や弾き歌いの技術を向上させる。また、歌唱活動を取り入れた保育の模擬実践を重ね、相応しい実践の在り方について学ぶ。3年次では「教育」という視点から音楽を保育実践の手段とすることができるようになることを目指し、歌唱指導法、合奏指導法、指揮法などを扱い、そ

れらに必要な知識理解や技術の習得を行う。また、様々な音楽教育メソッド等の考え方に触れ、幼児期に行う音楽を用いた活動のねらいについて考察する。3年次の後半から4年次にかけては、リトミックに関する理論とその指導に必要な即興演奏法について学ぶ。習得した知識や技術を用いた模擬保育を行うことや、リトミックをしている子どもの様子を観察することなどを通して、実践力や応用力を養うとともに、音や音楽に対する感性を豊かにする。このほか、弾き歌い発表の機会を多く設けることで、練習の習慣をつけ、人前での発表に慣れることをめざす。また、互いの発表を聴き合う中で望ましい表現について学ぶ。

## 2.2. 教育組織運営

これまでFD/SD委員、研究推進委員、学生支援委員、相談員などを務めた。2019年度には、FD研修の一つとして取り組む授業参観の実施および取りまとめを担当した。また、2016年度および2020年度には学生支援委員の立場から学生の教育環境を整え支えることに携わった。

## 3. 教育の理念

教育理念としては、以下のことを挙げる。保育士および幼稚園教諭の養成に携わる立場においては、対象学生との接点が授業やゼミ指導に留まらず、4年間にわたり多くの面で密に関わりを持つこととなる。そのため、これらの理念をもって接する機会は授業やゼミ指導以外の多くの場面において持たれる。

### 3.1. 理念1 「基礎の徹底をはかることで苦手意識や音楽嫌いをなくす」

音楽指導において、音楽実技を手段とする豊かな活動実践を展開できるようになることを目指すためには、基本的なリテラシーとしての読譜や基礎技能の習得を徹底する必要がある。これら初期段階の学習においては、音楽のもたらす楽しさなどはなかなか実感しづらいものである。しかし、この段階の学習が徹底することによりその先の応用実践においてテクニックの自由度が増していくことを踏まえ、初期段階の基礎の学びはトレーニング的な要素を強め、個別の習熟度チェックや小テストなどを多く用いながら取り組んでいる。そのことによって苦手意識を取り去ることが、先の豊かな学習へと展開していくことを実感している。苦手意識を持つからこそ徹底して基礎を定着させることの意味は大きいと考え、受講生にはその意義を伝え、休まず努力を積むことの重要性を伝えている。

### 3.2. 理念2 「集団での学び合いを生かし、個々の関心意欲やスキルを高め合う教育」

実技演習分野は特に、個々の取り組みの質や量によってスキルの伸び方も異なる。とりわけ一斉授業においては個々のスキルの伸びがそう期待できないようにも思われるが、必ずしもそうではない。集団での学びの場でこそ育つ要素があることを日々実感している。

担当する授業においては後の 4.2. に記すような方法でこれらの指導を実践しているが、指導者がモデルを示すよりも、また望ましいあり方について理論的に説明するよりも、同じ受講生の立場の存在による取り組みに触れることは何より強い刺激を受けるようである。全体のモチベーションが上がることに加え、共感的に課題を捉え、自らに置き換えて改善策を考えることができるなどの点が大きなメリットである。音楽技能に関しては、整った模範的なものに触れると、つい自分の持つ実力や現状から程遠い境地のテクニックであるように捉えがちな傾向がある。互いの良さを認め合う雰囲気の中、経験値の異なる様々な学生の一人一人が主体的かつ意欲的に取り組むために、集団で学ぶ一斉授業であるからこそその可能性を感じている。

### 3.3. 理念3 「愛を教育の根幹に」

キリスト教主義教育の環境で学ぶ学生にとって、また卒業後様々な形で子どもの成長発達に寄り添う職業に就くことを目指す学生にとって、学生時代に関わる人間との間に「他者を思いやる気持ち」「自分や相手を大切に思う気持ち」を実感する経験は糧になると考える。知識や技術を豊富に蓄え、責任ある立場としていざ子どもやその家族と向き合うとき、最終的に問われるのは人間性ではないだろうか。そう考える信念のもと、関わる学生との間においては人との間にこそ実感できるぬくもりを持ち、「愛され大切にされている」という実感が得られる関係づくりを心掛けている。

## 4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

### 4.1. 読譜指導の徹底

ピアノ演奏や歌唱の技能について、授業では入学年度の1年間のみ個別指導を行う体制を構えている。そのため、初年度の一年間においては、学生がいかに自力で読譜する力を養うか、またその後のスキルを継続して向上させるための鍛錬の方法を学び練習習慣を身に付けることができるかは重要である。一人一人の持つ音楽スキルに自由度を持たせることにより、これを用いた実践が豊かに展開していくことを可能にする。そのため、読譜に必要な基礎知識や音楽理論、また演奏のための基礎技能の習得においては、指導の徹底および小まめな習熟度チェックをおこなっている。

### 4.2. 発表と相互評価の場を多く設定する

学生が個々に表現スキルを伸ばしていく過程において、並行して発表および相互評価の機会を多く設けるようにしている。資格免許取得のための保育実習や教育実習、就職採用試験、そして幼保系施設への就職後を想定し、練習の成果を用いて実践に取り組むということに備えては、学びの段階において緊張の場を数多く経験することが不可欠と考える。また、

望ましい表現のあり方について学ぶための一つのプロセスとして効果的と考えているのが、相互評価を取り入れることである。演奏や表現スキルを高めることの前に、見る目や聴く耳を肥やすべく、他者の発表を評価する立場を多く経験できるようにしている。これを通し、課題点に気付く視点を持つとともに、目指す到達点を具体的なイメージとして持つことは、ひいては自らに求めるイメージが明確になると考えている。また、子どもの目に映る保育者の姿を客観的に捉え、自分自身の在り方を見直すきっかけにもなっているようである。学生主体の双方向的な学習の実現においても効果の高い方法であると実感している。3年次の童謡歌唱発表会や4年次の卒業演奏発表会は、授業の一環ではあるが、大学チャペルのステージでの発表会を催し、在学生や保護者を客席に招くなどして有意義な成果発表の場としている。

#### 4.3 語彙や表現力を豊かにするための取り組み

応用実践的な授業において多く取り入れているのが模擬保育の実践である。歌唱等の音楽表現活動を取り入れた保育実践において、乳幼児期の子どもと向き合う保育者には、とりわけ感覚や感性の豊かさが求められる。子どもの表現を受容する感覚、子どもの想像する世界に寄り添う感性、また言葉を用いて思いや考えを共有する力を磨こうとするとき、現代の若者世代の言語環境や語彙の乏しさには課題を感じている。そこで、模擬実践の機会を通して語彙力を高めることを目指し、分かりやすく丁寧な言葉を用いることへ意識を向けることは有意義であると実感している。具体的には、幅広い意味合いを併せ持ついわば便利な若者言葉や具体性のない漠然とした表現の幾つかをNGワードとして封じることにより、より丁寧で具体的な表現を意識的に探して用いることを癖づけることに繋がっているようである。

### 5. 教育改善のための努力

#### 5.1. 改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

学期ごとに実施される学生による授業評価アンケート結果を受け、その数値評価や自由記述コメントをもとに改善に努めている。担当する科目は主に表現活動を主とする演習科目であることから、全ての受講生の集中力を一定に保つため、受講態度にまつわる秩序を保つことが必要である点などは、これまで課題となった。また、個々の実践力を確実に伸ばすため、あるいはそのための実践の機会を全受講生におよそ均等に与えるために、一斉授業の実施方法に課題を抱えてきた。これらの問題を改善させるため、まずは開講初回のオリエンテーションにおいて受講に際する心構えや約束事の徹底をはかることに取り組んできた。また、毎年度実施方法を少しずつ改善変更しながら、一斉授業の中においても一人一人に対する個別の課題を見出して指導する機会を均一に持つことができる現在のスタイルに行き着いた。今後も学生の声に真摯に耳を傾け、改善を心掛けたい。

## 5.2. 改善努力2 出席カードの記入とフィードバック

これまで、学期末に行う授業評価アンケートのほか、授業の終わりに出席カードを活用してきた。自由記述欄に書かれた受講生からのコメントには、その日の授業の感想や要望、質問などが書かれるため、そこから課題を見出した際には学期末を待たずに改善工夫に取り組むことができる意味で有意義である。

## 6. 教育の成果・評価

授業評価アンケートにおける数値評価からは、おおよそ平均的に高い評価を得られている。音楽演習を主とする科目の性質上、受講生が主体的かつ実践的に学ぶことができる授業であることから高い満足度が得られやすいともみている。一方、経験値の差のひらきはあるものの、多くの受講生が大学で初めて専門的に学ぶことになる内容においては、可能な限り分かりやすく丁寧に取り扱い、尚且つ小まめに理解度をチェックすることを心掛けている。これらのことにより、最終的な理解度や満足度を高めることに繋がっているのではないかと考える。

## 7. 今後の教育に関する課題と目標

現状において、担当する科目の授業のほか、学生の実習前や就職試験前にはそれぞれ実技の対策指導を個別に行っている。明確な目的や必要性をもって個々に異なる課題に取り組むこれらの個別指導は、その成果が及ぼす影響から考えても重要視せざるを得ず、優先的に対応している。しかし、授業外の時間をつかっただけの個別対応には様々な意味で限界があり、この指導時間の持ち方については課題である。これらの段階において指導が必要になる内容を一斉授業の中に組み込む工夫や、基礎技能習得段階のより一層の挺入れを実践することが今後の目標である。

また、そのような状況下、日頃の指導の在り方を振り返ることや、自己研修の時間を十分に持つことにおいても、現状には課題を多く実感している。今後は指導の効率化をはかりながら指導者自身の自己研鑽にも励み、より一層充実した教育活動が展開できるよう努めたい。

## 8. 参考資料

- (1) 担当科目シラバス
- (2) 授業評価アンケート結果